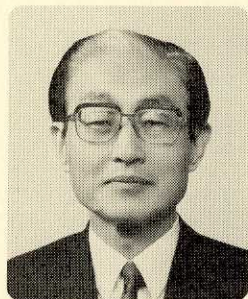


ご挨拶



財団法人 成長科学協会

理事長 鎮目 和夫

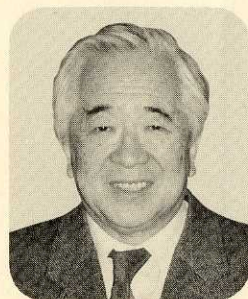
当協会では、設立当初（昭和52年）から子どもの身体の成長の促進を主たる目的として事業を行なって参りました。しかし、背が伸びても心の発達にそれに伴わなければならないということから、平成4年協会内に、心の発達研究委員会を設置し研究集会を行なうと共に、一般公開のシンポジウムもこれまで10回行なって参りました。

今回は、最近問題になっている子供による暴力、子供の殺傷事件について、子供にどう対処すべきか、そして子供に命の尊さを教える事の大切さを考え、シンポジウムを開催することにいたしました。

今回のシンポジウムのテーマ・演者などは故岡宏子先生に作っていただきました。

岡先生のご冥福をお祈りするとともに、少子化した子供の心をよい方向へ発達させる参考になれば幸いです。

そうなれば岡先生もきっと天国で喜ばれる事でしょう。



心の発達研究委員会

副委員長 東 洋

心の発達研究委員会は、発足以来、こどもたちが健やかに、ひととしての可能性を十分にのばして成長することを願って活動してきました。公開シンポジウムも今回で11回となります。前の2回が生涯発達に関するものでしたが、子どもの暴力、傷害事件が多発し、大きな問題を投げかけていますので、今回はそこに焦点をあてることにしました。ただ時代のせいにして困ったものだと嘆じたりするのではなく、子ども達の“よく生きる”力を信じる立場で考えるのが、長く委員会を指導され、病床でこの企画案を仕上げ、亡くなられた岡宏子委員長のお志であったと思います。この問題をどうとらえるか、広い視野に立った活発な討論を展開したいと思います。

開催にあたって

子どもの殺人や傷害事件にからんで、「キレてしまった」ということがよく出てきます。「キレる」とは心理的にはどういうことなのでしょうか。「頭に来る」のとどう違うのでしょうか。どういう子どもがキレやすいのでしょうか。子どもがキレたら親や教師はどうすればよいか？キレやすい子どもとどう付合っていくか？これらの問題について、小児精神医学者として多くの子どもを見て来られた崎尾先生、発達心理学者で愛着や感情の研究で知られる高橋先生、教師として学校で教えながら子どもの問題を考えておられる関先生に、それぞれのお立場から述べていただき、さらに聴衆からの質問や具体例にわたって討論します。

心の発達研究委員会 副委員長 東 洋（文京女子大学人間学部教授、東大名誉教授）

委員 小林 登（甲南女子大学教授、国立小児病院名誉院長）

” 原ひろ子（お茶の水女子大女性文化研究センター教授）

” 大野澄子（日赤医療センター）

” 丹羽洋子（育児文化研究所長）

” 森 玲子（精神障害共同作業所アリス）

プログラム

テーマ: キレル子ども

～その現状、なぜ起こるのか、その対策は～

司会 東 洋

13:00～ 開会 あいさつ

鎮目 和夫

プレゼンテーション

東 洋

演者からの提言

崎尾 英子

関 文枝

高橋 恵子

休憩

ディスカッション質疑応答

ま と め

東 洋

～16:20

演者紹介

東 洋 (あずま ひろし) <司会>

文京女子大学人間学部教授。東京大学名誉教授。日本発達心理学会会長。教育心理学、発達心理学会の重鎮。東京大学教授、教育学部長を経て現職。心の発達と教育について、日米比較研究など。

崎尾英子 (さきお えいこ)

国立小児病院心療内科、精神科医長。国際キリスト教大学、慈恵医科大学卒業、専攻精神医学、児童青年精神医学、平成3年より現職。「新しい子どもたち」「かよいあいたい心たち」等の著者。NHKラジオ第一放送「子どもと教育電話相談」の回答者。

関 文枝 (せき ふみえ)

養護教諭。小学校17年、中学校10年、計27年の現職。16年前から、ヘルスカウンセリングを必要としている児童生徒に携わっている。

高橋恵子 (たかはし けいこ)

聖心女子大学文学部教授。東京大学大学院教育学研究科(教育心理学専攻)修了、教育学博士。専門は発達心理学。人間関係の生涯発達、人間関係が適応や社会的行動に及ぼす影響についての研究に取り組んでいる。「自立への旅たち」、「生涯発達の心理学」(共著)、「文化心理学入門」(共著)、等の著者。